

JSTを イノベーション創出のハブに

中 村道治前理事長の後任として、国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) の経営を担うことになりました。この場を借りて、改めて皆さまのご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

今、日本は明治維新、第2次世界大戦後に続く大きな転換期にあります。財政赤字を抱えつつ、急激な人口減少と超高齢化の時代を迎え、さまざまな分野においてイノベーションの創出と共に、高度成長期とは異なる戦略が求められています。一方、人類社会は地球規模の環境変動や、70億人を超える急激な人口増加などの問題を抱え、課題解決型の科学技術の発展が強く求められています。このような時代の要請の下、JSTは「イノベーションのナビゲーター」として、わが国の科学技術の推進を通じて近未来の日本に希望をもたらす、唯一無二の責務を担っているといえます。私は、この責任の重さを自覚し、JST職員と一体となり、大学や産業界の皆さんとさらに協働を深め、全力で職責を果たしていく覚悟です。

21世紀も15年を過ぎ、いま私たちは第4の産業革命ともいべき大きな変革期に差し掛かっています。情報通信技術の加速度的な進展を背景に、社会構造や産業構造は大転換期の最中にあります。

ピーター・ドラッカーはその名著「イノベーションと起業家精神」の中で、イノベーションを可能にする契機として、企業内の契機4種に加え、企業外(社会)の契機として3種「人口構造の変化」「認識の変化」「新しい知識」を挙げています。急激な人口構造の変化を抱えつつ、IoT(モノのインターネット)による社会構造の変化・認識の変化、ノーベル賞に象徴される新しい知識に満ちた日本は、いわばイノベーションの契機に満ちた環境下にあるといえます。

ではいかにして、イノベーション創出を恒常化・構造化していくのか。ヒントは、再

びドラッカーにあります。前述の著書によれば「起業家精神は生まれつきのものではない。創造でもない。それは仕事である。(中略)ただしそのためには意識的な努力が必要である。学ぶことが必要である」と。すべては、学ぶことから始まります。JSTの体験したイノベーションの成功例にとどまらず、いま一歩実現、社会実装化に至らなかった革新的な技術開発について、主観を排除しつつデータをよく分析し、その知識を皆さんと共有することから、イノベーションの構造化は始まると考えます。理事長就任にあたり、改めて皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げます。



● Profile ● 濱口 道成 はまぐち・みちなり

1951年三重県生まれ。医学博士。80年、名古屋大学大学院医学研究科博士課程修了。同年、名古屋大学医学部附属癌研究施設助手。85年、米国ロックフェラー大学分子腫瘍学講座研究員(88年8月まで)。93年、名古屋大学医学部附属病態制御研究施設教授。97年、同大学アイソトープ総合センター分館長。2003年、同大学大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授。05年、国立大学法人名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長。09年、同大学総長を経て15年10月より現職。